

【論文】

幕末期に上海を訪れた岸田吟香の行動空間とコミュニティ形成

愛知大学名誉教授、愛知大学東亜同文書院大学記念センター・フェロー 藤田 佳久

はじめに

本論は、東亜同文書院の設立構想を抱き、それを実現した荒尾精の活動の背景に存在した岸田吟香を取り上げ、岸田吟香の最初の上海での行動から、その原点を浮かび上がらせることを中心課題とし、あわせてそれがその後の岸田吟香の展開の道筋や、後に出会うことになる荒尾精に与えることになる影響力の基盤についても若干明らかにしようとする所に目的がある。

荒尾精が初めて上海を訪れたとき（1886、明治17年、28歳）、すでに上海で活躍していた岸田吟香は、十分上海で場数を踏み、日本人初のすぐれた国際商人になっていた。その岸田吟香（以下、吟香）が初めて上海へ足を踏み入れたのは、1866年（慶応2年）の9月、33歳の時であった。そして翌年の5月には帰国している。約8ヶ月弱の上海滞在であった。

関係者にはよく知られているように、吟香が初めて上海へ出かけた理由は、横浜へ来ていたアメリカの長老派宣教師で医者でもあったヘボンに評価され、和英辞典、英和辞典の印刷のため、まだ活字が日本になかったため、ヘボンと一緒に上海へ向かったことによる。当時の上海では、キリスト教布教用の印刷を行う初の活版印刷所である英華書館があり、そこで活字の組版について校正を担当した。しかし、印刷所の組版には時間がかかるため、その間に自由時間も多く、滞在時間は短いものの、そこに上海での吟香の自由な行動が可能になり、吟香の特性が現れることになった。しかも、この自由な吟香の行動は、毎日吟香の手で詳細に記録され、しかも、ほとんど漢字を使わないという吟香の主義により、ひらかなでの話言葉で平易に書かれ、この点を評価する研究者も多い。本論はこの日記（呉淞日記）をベースにして吟香の行動を分析する。

1. 吟香の歩みと『呉淞日記』

（1）吟香の歩み

すでに吟香については多くの著作があり^①、生まれ故郷の現在の岡山県久米郡旭町には「岸田吟香記念館」が開設され、生誕の記念碑も建立されている。この地が当時、三河の挙

① ①杉浦正（1996）『岸田吟香—史料から見た一生—』、汲古書院。

②杉山栄（1993）『先駆者岸田吟香』、大空社。

③杉山栄（1951）『岸田吟香略伝』、岸田吟香顕彰会。

④山口豊編（2010）『岸田吟香『呉淞日記』影印と翻刻』、武蔵野書院。

⑤藤田幸夫（1964）「岸田吟香」、『電通広告論誌』38号、65-73。

母藩の所領であったため、後に数回挙母藩に士官し、脱藩もしている⁽²⁾。

岸田吟香は 1833 年(天保 4 年)、美作国久米北上郡埴和村で生まれた。幼名は辰太郎、名前は太郎だが、名前はくると変え、やがて銀次、銀治系に落ち着き、きままな理由から「ままよの銀」となり、さらに「銀公」となって、最後に到達した名前が「吟香」という号であった(以下、吟香と呼ぶ)。この点については日記の中でも触れている(1 月 29 日)。

吟香は大百姓の子であったが、こどもの頃には没落していた。彼を救ったのが、吟香の才能を見込んだ大庄屋の安藤善一で、彼は挙母藩の現地のまとめ役もしていた。自分の仕事もさせながら吟香に漢籍を学ばせた。吟香にとって人生の出発点での最大の恩人となった。安藤はさらに 14 歳になった吟香を津山城下の津山に送り、漢学を学ばせた。吟香はそこで多くの分野に渡る幅広い人脈を作ったとされる。その中で小原竹香から竹画もならい、これが後述するように後の上海時代に上海の文人たちとの交流の鍵にもなった。また、津山時代、吟香は学ぶ一方で私塾も開き、青年たちに漢籍を教えるほどの力量を示した。

そこで力量をつけた吟香は、1852 年(嘉永 5 年)に江戸の津山藩邸につとめ、幕府の昌平坂学問所でさらに漢学をきわめる一方、水戸藩邸などでの講義をし、藤田東湖とも交わっている。学問の道一筋の時代を過ごしたといえる。しかし、1855 年(安政 2 年)、安政大地震が江戸を襲い、藤田東湖は圧死、吟香は体調不良も生じ、療養も兼ね、ふるさとへ戻った。

その後、大阪で儒学者たちと交流した後、再び江戸へ戻り、昌平坂学問所を軸に水戸学系の藤森弘庵の塾へ入り、尊皇攘夷派に同調したため、幕府からにらまれ、仕え始めた挙母藩からも脱藩し、上州伊香保へ逃避している。この挙母藩時代の裏付けは、豊田市郷土資料館の吟香展の図録に詳しい⁽³⁾。

安政の大獄(1858 年)とその後の井伊大老の暗殺事件の後、吟香は再び江戸へ戻り、武士をやめ、庶民の生活の中へ潜り込み、左官、三助、荷運び、吉原での妓楼や飯屋の主人などをさまざまなドラマチックな体験を経験している。この経験が、後にヘボンによる和英辞書づくりに協力出来るきっかけになった。また、このときの何者にも縛られない体験が、後の庶民目線の言語による文体とそれをベースにした日本初の新聞発行や多くの実用書の出版へ発展することになった。

それが具体化するのには 1864 年(元治元年)、眼を病んでいた吟香が横浜に来ていた宣教師で医師のヘボンに会い、なかなか治らなかった目を 1 週間で治してもらったことにあった。折からヘボンは和英辞書を作成中であり、ヘボンは吟香の幅広い漢学と和学の知識と多様な職業経験を評価し、それを受け、吟香はヘボンの和英辞書の作成に協力する頃になり、ヘボンの家に移り住み、併せてヘボンの薬の調合などを見ながら習得した。この習得が後に日本と清国、民国で「精錡水」ブランドの目薬販売の大ヒットにつながった。

1866 年(慶応 2 年)、和英辞書の原稿が完成すると、吟香を伴いヘボンは同年 9 月、上海へ出かけた。日本の木版技術では印刷できず、当時の上海には宣教師たちが作った「美華書館」という活版印刷所ができていたためである。吟香は校正のほか、ひらかな、かたかな、かななど日本の文字の活字づくりの協力が不可欠であったためである。そして翌年の 5 月まで、短い期間ではあったが、吟香の初めての海外、清国、上海生活がはじまった。

そこではヘボンとのかかわりのほか、吟香独自の世界も展開していくことになった。そし

⁽²⁾ 豊田市教育委員会(2013)『明治の傑人 岸田吟香』、豊田市郷土資料館。

⁽³⁾ 前掲(2)。

てその行動軌跡が吟香の毎日の日記に記録されたのである。

（２）吟香の「吳淞日記」

吟香の上海での日記は、1866年9月から翌1867年5月までの8ヶ月弱の上海滞在中に「吳淞日記」として几帳面に記録されたものである。それらは表紙の記録からみると6分冊におよんでいたことがわかる。しかし、現在目にすることが出来るのは、『社会及国家』に収録された「第二の冊」（12月1日～12月30日）のほか、「第三の冊」（1月1日～2月5日）、「第五の冊」（3月1日～3月29日）、「第六の冊」（4月1日～4月4日）の現物の三冊である。滞在中に毎日日記を書いていたとすれば、9月、10月、11月、2月、4月の多くが欠けており、見られるのは全体の半分の量かと思われる。とくに第1冊の欠落により、吟香の最初の上海への印象や虹口地区での正確な居住地をわからないままにしているのが残念である。欠落分は後述するように、上海へやってきた日本人の役人たちが、吟香の日記を読みたがり、それが帰ってこなかったり、幕府へ回覧されたりしたことのようなのである。外部から読まれる経験をした吟香は後半、多分に読まれることを意識して自分の考えを日記の中で述べたりしているようにも見える。それはそれで吟香の思考や行動をより具体的にうかがうことにもつながってくる。

このように日記が全部そろっていないのは実に残念ではあるが、しかし、残されている日記自体からも多くの情報が沸き出すように読みとれ、優れて興味深い。

この日記は、吟香が漢学を極めながらも、従来の漢語調の文章を嫌い、口語調的に自由に思いのままに文章を書いたことが注目され、その文体が研究者の研究対象になったりしてきた⁽⁴⁾。また、ヘボン研究者はヘボンを吟香と関係させながら、多面的に研究をしてきたし⁽⁵⁾、ヘボンの和英辞書の研究⁽⁶⁾、その辞書を印刷した上海美華書館についての研究⁽⁷⁾、吟香の一生に関する研究の一部としての上海時代の裏付けとしての研究⁽⁸⁾など多くの側面から多くの研究がなされてきた。

しかし、「吳淞日記」という吟香による上海日記に記録された吟香の思考や行動を正面から取り上げた研究はない。これは、吟香があまりに多様で大きな事業をいくつも成し遂げた

⁽⁴⁾ 前掲（１）の④。

岡田政幸（2003）「活字メディア時代の聖徳一随行者、岸田吟香、その文体上の使命―」、『言語情報科学』（東京大学総合文化研究科）5号、51-64。

⁽⁵⁾ 権田益美（2010）「幕末から明治初期における日本の近代化とヘボン―彼の交渉しに見る位置考察―」、『比較文化論集』（関東学院大）、3号、137-164

⁽⁶⁾ 権田益美（2009）『『吳淞日記』にみる岸田吟香とヘボン―『和英語林集成』の編集と使節団の交渉を中心に―』、『比較文化研究』（関東学院大）、2号、33-52。

⁽⁷⁾ ①宮坂弥代生（2007）「東洋におけるプロテスタント伝道と印刷―美華書館（アメリカ長老会印刷所）を中心に―」、『中国21』（愛知大）、vol.28、179-191。

②稲岡勝（1995）『初期商務印書館の源流―美華書館、修文書館、岸田吟香、金港堂―』、『出版教育研究所報』、7号。

③樽本照男（2012）「ヘプバーン、マテイーア兄弟と美華書館』、『清末小説』、36巻、1-54

⁽⁸⁾ 前掲（１）の②。

陳祖恩（2016）「岸田吟香在上海時文化活動」、『文化共生学研究』（岡山大社会科学研究科）、15号、25-38。

だけに、新聞発行や台湾への従軍、天皇の行幸記事、書籍の発行、社会福祉事業への貢献、石油採掘、東京・横浜館の航路開発、初めての本格的な広告業、そして目薬販売と中国への進出、そのほかの幅広い事業展開に個別的あるいは総合的な研究や言及が中心的に行われ、上海での吟香の行動とその内容およびその意味についての研究はあまり注目されなかったためように思われる。

そこで、本研究では、吟香の上海での思考や行動は、具体的にどのような内容であったのか、それは初めての外地でそれまでの日本での思考や行動と比較が出来るのか、上海で経験、見聞したことが吟香の内面的な新たな世界を築かせたのか、そしてそうであるならば、それがその後の吟香にどのような活動の展開を可能にしたのかなど、きわめて興味深い観点を意識し、その解明が出来るようである。吟香がほとんどの日本人が体験できないような異国経験を、先駆的に人生の前半で手に入れたことの意味を、具体的な活動を通して検討してみることは意味のあることだと思われる。

そこで以下、吟香の上海における行動をその広がり空間として見なしつつ、具体的に浮かび上がらせる作業から始めることにしたい。

2. 『吳淞日記』に記録された吟香の上海での辞書づくり

(1) 記録された頃の上海

前述で触れたように、吟香はヘボン夫妻と 1866 年 9 月 10 日に横浜を出航、9 月 15 日には上海に到着し、すぐに美華書館で辞書の印刷に取りかかっている。1866 年は幕府が一般民間人の海外渡航を認めた年でもあった。おそらくこの時点から民間人初の上海における吟香の日記記録が始まり、第 1 冊となったはずである。しかし、残念ながらこの 9 月後半、10 月、11 月一杯までの分は不明である。次の 12 月 1 日から始まる第 2 冊では、吟香がすでに上海で水を得たように動き回っている記録が展開しており、それを可能にした吟香の考えや行動への自信が第 1 冊の中で記録されていたはずである。したがって第 2 冊の日記の当初からは、突然吟香が十分に上海になれてしまっている状況からスタートすることになる。

吟香がヘボンと訪れた当時の上海は、アヘン戦争の結果、1843 年から外国へ開港、1845 年にはイギリス租界が設置され、次いでフランス、アメリカと旧上海の城市に北接して租界地区が拡大、植民都市の形成が始まった。機能的には商業と貿易の複合的都市機能が付加されて、漁村起源の上海が次第に金融や貿易などの外国資本の流入によりその基盤を大きく転換し、従来のこの一帯の中心都市であった蘇州を上回っていった。黄浦江沿いのバンドには初期の商館が連なるようになり、吟香たちよりも少し早く 1862 年に初めて千歳丸で上海を訪問した日本人の各藩から派遣された藩士たち一行を驚かした⁹⁾。

しかし、その前、1853 年、秘密結社小刀会は隣の県で武装蜂起し、上海を 1 年半にわたって占拠し、知県は殺され、城内の大半と小東門外の十六舗が焼かれて荒廃し、城内の住民

⁹⁾ ①藤田佳久 (2015)「幕末期に日本人が訪れ記録した上海像—納富久次郎と日々野輝寛の場合—」、『同文書院記念報』(愛知大学東亜同文書院大学記念センター)、vol.23、91-114。

②藤田佳久 (2016)「幕末期に上海を訪れた日本人青年藩士たちの行動空間—名倉予何人、中牟田倉之助、高杉晋作—」、『同文書院記念報』(愛知大学東亜同文書院大学記念センター)、vol.24。143-173。

は租界内へ逃げ込んだ。そのため、租界は一気にふくらんだ。1860年代に起った太平天国の乱は、城内だけでなく、租界も狙われたため、再び多くの住民が租界内へ逃げ込んだ。太平天国軍は蘇州を都としてこの一帯を戦場に巻き込んだため、上海外の住民も租界内外へ避難し、黄浦江の水上也避難船で埋め尽くされた。

1862年、前述した千歳丸が藩士たち一行を乗せ、上海に上陸したのはちょうどこの頃で、黄浦江に満ちた大量の船とバンドのまだ2～3階建てではあったが、西洋の商館群に驚いている⁽¹⁰⁾。港の郊外では太平天国軍との戦いを一行は身近に感じたほどであった。一時は危機に直面した租界と城内を救ったのは、英仏米の租界の軍隊で、軍規が乱れていた太平天国軍を破っている。上海の租界および城内の清国人はそれに安堵した。しかし、人口が急増した租界は西側へさらに拡大した。清国人の租界への流入も認められ、東西南北の街路に全国和省名と都市名をつけて整備するなど、租界は都市的整備に迫られた⁽¹¹⁾。

吟香が到着した上海は、このように直前まで戦乱にとり囲まれながらも、やっと落ち着き、租界が新たな都市的発展の局面を迎えた状況下にあった。その頃、つまり、1865年の上海の人口は約70万人、うち租界内の人口は約15万人であった。戦乱中、各地から避難してきた人々の多くが上海へ定住した結果であった。

吟香はそのような新しい動きの出てきた上海で、ヘボンの印刷を助ける一方、自由に町の中を徘徊したのである。

(2) 和英辞書づくりに関わる吟香とヘボン

吟香の上海での仕事は、まずヘボンの日本から持ってきた和英辞書の原稿を、英華書館という活版印刷所で印刷し、その組版の校正と足りない日本文字の活字の原型を提供したりすることになった。

清国においては、宣教師による伝道用の出版活動のための印刷所が、早くも1830年代前半に広州でひそかに開設されたとされるが、公式には1860年の北京条約によるキリスト教の布教が正式に認められた後、各地で可能になったとされる⁽¹²⁾、こうして英華書館は、1844年にガンブルによって華英校書房として澳門（マカオ）に設立されたあと、翌年寧波に華花聖經書房として移転。そして1860年上海へ英華書館として移転してきた。この研究をしている宮坂弥代生は、上海では当初、虹口へ立地したという説を裏付けたとした。そして1862年に小東門外十六舗に移転し、1875年に北京路へ移転するまで続いたとしている⁽¹³⁾。したがって、ヘボンと吟香が訪ねた英華書館は小東門外にあったことになり、実際、吟香の日記にも小東門外と記されている。

問題はその位置であるが、従来明確ではなかったが、宮坂は宣教師カルバートソンの記述から、小東門外の十六舗で、前述した小刀会に焼かれた十六舗の土地で、旧フランス巡捕房近くとして関係図を示したが、住宅地図中でここだと正確な場所は明言できないとした⁽¹⁴⁾。しかし、状況は十分であり、ここではそれに従って位置を特定し（図1）、以下の各図に示

⁽¹⁰⁾ 前掲（9）。

⁽¹¹⁾ ポット（1940）、土方定三、橋本八男訳『上海史』、生活社、第7章。

村松伸（1991）『上海・都市と建築—1942～1945—』、PARCO出版局、361+12。

⁽¹²⁾ 前掲（7）。

⁽¹³⁾ 前掲（7）の①、③。

⁽¹⁴⁾ 前掲（7）の①。



図1 吟香が通った小東門外の英華書館の位置の推定地(矢印)
(ベースの地図は19世紀末の「重脩上海縣城廂推廣租界地理全圖」)

した。

なお、英華書館の責任者ウィリアム・ガンプルは、その後長崎で本木昌造に活版印刷の技術を教え、それが日本の活版印刷の草分けとなったという⁽¹⁵⁾。

このように吟香がヘボンのもとでこの英華書館で作業することは明らかになった。しかし、その作業にかかわる関係分を日記から見ていくと、そんなに記述は多くなく、むしろヘボンとの話や上海の町中での行動の方が生き生きとあふれるように書かれている。印刷は版下が出てくるのに時間がかかり、そのあいだに自由時間がかなりあったということが、吟香を上海の町中に引きつけたのであろう。

現存する残された日記の最初の12月では、7日にヘボンから沢山のミカンを差し入れてもらったとある。それまでの日記が欠けているからうか

がい知れないが、その前に吟香がかなり印刷業務に関わったことがあって、そのお礼のミカンであろう。

9日には、4～5日前にヘボンが英華書館（以下書館）で校正をしていたと記しており、版下がかなり出ていたことをうかがわせる。そんなところへ偉丈夫な男（葛芝眉）が押しかけ、ヘボンが男をつきだしたとある。この件はよくわからないが、吟香はこの男が以前、隸書を持ってきたので筆談もしたとしており、書家なのか書を扱う商人なのかはここではまだわからない。吟香はこの男の名を知っており、すでにそれまでに何らかの関わりが町中であつたことがうかがわれる。

11日には、ヘボンが、世界史の中で、不老不死の話が各地にあり、スペイン人がアメリカ発見時にも見つけた泉にそれを信じたこと、コロンブスはアメリカ大陸を発見したのではなく、その島々を発見したこと、士農工商の上にも下にも階級があるのは日本だけだ、などと話したことを記しており、ヘボンは機を見て世界の色々な話を吟香に伝えていたことがわかる。吟香はそれらの中で興味のある部分を記録したのであろう。

⁽¹⁵⁾ 前掲（7）。

13 日には 200 枚の版下が上がり、紙は 100 張分だと記している。本格的な進捗である。

20 日には、ヘボンの「かみさん」がミカンを差し入れている。13 日のお礼だろう。

25 日には、辞書が半分まで出来上がったとある。約半年で半分完成ということになる。

29 日には、ヘボンの部屋で、エジプト文字が仏、独、英の学者により象形文字だとわかったこと、エジプトの古墳の石塚（スフィンクス）は紀元前 500 年前には存在していたこと、中には部屋があること、ペルシャ領の中には人類発祥の地がある、などをヘボンから聞いている。これらの話も吟香の好奇心を高めたに違いない。

年が明けて 1 月 9 日には、朝鮮で仏人が 9 人殺され、米船も破壊されたので、米英仏が朝鮮を攻めることのニュースを巡り、吟香は朝鮮人がなぜそのような暴虐なことをしたのかと感想を言うと、ヘボンはどの国もはじめは自慢気で強いつもりになっているが、すぐ負けるだろうと反応している。それに対して、吟香は狩猟レベルの朝鮮を攻め取ってなにをするのかと疑問を呈している。当時の両者の認識の違いがわかる。

15 日には、ヘボンに届いた手紙から、ミカドの崩御を知り、吟香はなぜかと驚いている。日本でなにか不可解な異変を感じたのだろう。あわせてヘボンの情報収集力がわかる。

16 日には、ガンブルのところでヘボンが活字化しているのを見た、日本から上海へ来た（後述）仙さんから聞いている。

17 日には、「蒸気船」の言葉まで完成。

30 日には、400 張分の完成。「情死」という言葉まで校正。

以下 2 月は、残念ながら、日記が欠けているので、辞書づくりの状況は不明。

3 月になると日記があり、以下のように辞書づくりの記録が見られる。

3 月 6 日には、『英和辞書』が初めて版になって出てくる。2 月中にかなり進行し、全体がほぼ完成したものと思われる。

11 日には、ヘボンの「かみさん」が日本へ帰るため乗船。手を握り、お別れする。辞書づくりは山を越えたということがわかる。

翌 12 日には、「かみさん」の出航見送り。そしてあとヘボンと田舎道をふらふらと歩いて帰ったと記している。ヘボンの宿舎があるのは虹口地区で、まだ都市化していない農村を歩いたということだろう。吟香もほぼ同じ地区に宿舎があったはずである。

13 日、吟香が夢を見た話をしたら、夢を食う獺をシンガポールで見たとヘボンが説明した。また新しい情報である。

15 日、ヘボンが辞書の序を執筆。ほぼ本体は完成近しということだろう。

22 日、吟香が和英辞書の中に入れる日本文字のカナ、万葉文字。カタカナ、ヒラカナ、いろはのカナ、など五體の版下を作成。十分熟慮がなされた辞書が考えられたといえる。

23 日、ヘボンから、この辞書の名前をつけて扉絵に描いてほしいといわれ、吟香は『和英詞林集成』と命名している。完成の最終段階でヘボンは吟香の漢学の素養を汲み、吟香に日本名でこの辞書の書名を任せたと、ヘボンの吟香への信頼の強さが感じられる。

25 日、吟香は要望に答え、扉絵の版下を書き、そのさい、「詞」の字を「語」へ変更し、『和英語林集成』として辞書名を最終決定した。つまり、「1 厘」値上げしたという吟香流のシャレである。以上の完成に対して、吟香はヘボンから 50 枚（50 ドル）を受け取ったという。この件について、この額は当時の雇用人相当の額だという研究がある⁽¹⁶⁾。

⁽¹⁶⁾ 前掲（7）の③。

26日には、ヘボンが吟香に来月（つまり、4月）23日には日本へ帰るつもりだと伝えている。ここにヘボンと吟香の上海での仕事がほぼ終了したということになる。

以上のように、吟香はヘボンの辞書づくりに多いに貢献したことがわかる。言葉の抽出から校正までも吟香の手がなければ出来なかったであろう。また辞書名も吟香の命名であった。しかし、これだけの吟香の貢献にもかかわらず、ヘボンは資金提供をしてくれた本国の団体には、辞書づくりにおける吟香の貢献を一切伝えておらず、すべて自分一人の作品であるという形をとっている⁽¹⁷⁾。もし吟香が日記を残さなかったら、吟香の大きな貢献は伝わらず、辞書はヘボンだけの成果とされてしまっただろう。幕末の時代、最後に吟香に渡された手当が50ドルといい、吟香はヘボンの単なる作業の雇い人として扱われたといえる。そこには宣教師としてのヘボンの中に鎖国の中にあった未開な日本人という偏見があったのだろう。

しかし、吟香はヘボンから多くの情報を得、とくに目薬の作り方をヘボンの作業から習得し、ヘボンの高潔な人格に敬意を感じ、その行動や態度、豊富な知識量から多くのものを得て、この直後の明治維新後、近代日本の幕開けを多方面で実践し、初の国際商人としても活躍する道を得たのである。ヘボンとそして上海での経験は吟香にとって日本を相対化してみることが可能にしたといえる。

3. 『呉淞日記』に記された吟香の上海での行動軌跡

（1）吟香の外出日と在宅日をめぐって

吟香は、以上のようなヘボンとの辞書づくりの手伝いを、英華書館と時に宿舎で行ったが、それ以外の多くの時間を上海の町歩きで徘徊し、上海人や途中で日本から来た日本人と楽しんだことがよくわかる。ここではその足跡を見してみる。

全体として、吟香の行動を見ると、日記の記録日数は、12月は30日分で、毎日記録され、翌1月も30日分で、この月も毎日記録されている。2月は1月につづく5日分のみで、内1日分が記録なし。3月は29日分で毎日記録。4月はそのつづきで4日分のみである。従って総記録日数は当該日数の98日のうち97日で記録され、ほとんど毎日記録されていたことがわかる。

そのうち、記録に見られる外出日数は、近くの散歩や湯屋へ出かけた6日を含め43日になり、滞在中の約半分近くを町の中へ外出している。一方、外出しない日を見ると、12月から1月にかけて、降雪や厳寒の日に見られ、体調不良と明記した日が2日、その前後も外出をせず、家でもっぱら来客の相手をしている。もっとも多いのは、次の2つの理由で、一つは本来の仕事であるヘボンの辞書づくりのサポートであったり、ヘボンと部屋で会っての意見交換や雑談の日である。前述したように、いずれも吟香にとってはヘボンからの思考や知識、行動の吸収につながる大切な時間であったように思われる。もう一つは、多くの上海人との交流の中で、吟香の描く竹の絵が評判となり、「東洋先生」と呼ばれて有名になり、知り合った上海人から次々と竹の絵を所望され、時にかれらが持っている書画や物と交換さえするほどになっていった。その点で吟香が描く竹の絵は、吟香と上海の文人や商人たちとを結びつける重要な鍵になっていったと思われる。この竹の絵こそ、前述したように、か

⁽¹⁷⁾ 高谷道男編訳（1959）『ヘボン書簡集』、岩波書店、176-182。記載なし。

つての津山時代に学んだ竹画の成果がこの上海で生きたといえる。そのため、吟香は後述するように、竹画を描くために必要な紙屋を探したり、筆や墨の店を探し、それらの店主と仲良くなったりした。雨など天気の悪い日や所望された竹画の注文がたまと、自宅で丸一両日、竹画を書いて過ごしていたことがわかる。

（２）吟香の上海での徘徊

①上海人との交流

吟香は前述したように、現存する日記の中でも滞在日数の半分近くを外出し、上海を徘徊している。そのきっかけは日記の第 1 冊を欠くため不明であるが、津山から江戸へ出てきた時も、漢学を学ぶ過程でも、好奇心は旺盛であり、武士をやめてからは庶民の中へ飛び込み、色々な職業を体験し、それがへボンに気に入られた経緯である。ましてや異国の地、上海でも最初から好奇心に満ち、上海や上海人に積極的に接触したと思われる。漢学の素養は十分筆談に生かされた。当時の清国では標準語はなく、各地から上海へやってきた人たちの中で、文字の書ける人たちは筆談で交流しており、吟香の筆談は特別視されるものでもなく、上海人の中に溶け込めたものと思われる。

以下、徘徊分のすべてではないが、その内容や傾向がわかるように考慮しつつ日記の順に示してみる。

現存する日記の最初の 1866 年（慶応 2 年）12 月 1 日では、ぶらぶら遊びに出たとあるが、行き先は黄浦江沿いの諒記で、知り合った日本人の弘光は正月に香港から帰ると知り、友人がいなくて寂しい限りだと記している。弘光とどのように知り合ったのかは前の日記がないので不明である。後にはよく一緒に出歩いている。この時期の上海に日本人がいたことがわかる。1882 年に千歳丸一行が幕府のもと藩士たちをつれてきた時の旅日記を分析したことがあるが、その時、音吉なる日本人が上海にいと知り、彼を探すか、すでにわずかの差でマレー方面に移住した後で会えなかったと記されていた⁽¹⁸⁾。音吉は知多半島から出航後、漂流し、各国を巡って上海にたどり着いていたとされる。一行は異国で日本人に会えるのを楽しみにしたようだが、音吉の方は鎖国中の日本から役人たちが来るというので恐れ、上海から去った可能性もある。弘光もどうやら上海に定着しているわけではなさそうであり、そんな東アジアを自由に移動する弘光に吟香は興味を持ったに違いない。

12 月 3 日には、瑞興号にいる学松が日本から帰ってきて、梅屋、小林屋、野沢屋から吟香への手紙を預かってきたとあって、それら手紙を読み、火事情報に胸を痛めている。公的ではないが、人づての方法で手紙が日本と上海の間でやりとり出来ていたことがわかる。この方法はこのあともしばしば記録されている。当日すでに懇意になっていたのであろう張斯桎（魯生）先生に海屋から届いた海苔を味合わせている。また、12 月 5 日には、凌蘇へ題句を乗せた竹画をもたせている。この時期、早くも吟香の竹画が有名になっていたことがわかる。12 月 6 日には野道を散歩し、よい景色を楽しみ、白髪の老人と知り合いになっている。12 月 7 日は、清国へ来てさらに痛感したのであろう四角い漢字文字への拒否と、読みやすい文字での実用本の出版の必要性を論じて記している（後述）。

こうして、1866 年（慶応 2 年）、12 月 8 日、この現存する日記のなかでは最初の上海の徘徊を行っている。図 2 がそのコースである。最初は少し細かく見てみよう。日記を見る

⁽¹⁸⁾ 前掲（9）。

と、いきなり小東門外の英華書館へ出かけたなら、そこで黄延元が、先刻、張魯生、涂子巢、高鶴亭の3人が吟香を訪ねて行ったと言うので、反省。そこで瑞興へ行き、そこの学松と会うと書画屋が画帳を売りつけに来る。吟香は早くも上海の書画屋の知るところとなることがわかる。2老人と料理屋へ向かい、あと1人で英華書館へ行ったが、ヘボンはまだ来ていなかったようだ。そこで上海の中心である城内（城壁で囲まれた町の中）へ足を伸ばし、詹大有という店で、先日注文した象牙管の筆と墨を受け取っている。前述したように、吟香の竹画はこのときすでに有名になり、そのための道具をあつらえたということであろう。そしてこの店とはすでに懇意になっていたこともわかる。場内の中心である城隍廟の周辺は門前町であり、伝統的な商品を扱う店が集中し、これ以降も吟香はこの一帯を徘徊している。実際この後も、近くの玉和堂で筆談し、二妙堂で筆を購入している。そしてそこへ涂子巢がやってきたので、二人で廟の前通りを西へ向かい、葛芝眉の家へ。彼は本を読み、文も少しかけ、著作もあるとして面白い男だと見ている。しかし、この男は唐や宋などの偽物を吟香に売りつけようとしたので、吟香は筆談だけで別れている。前述したように、この男はこののちヘボンの所へ押しかけ、ヘボンに突き放されたという記録がある。

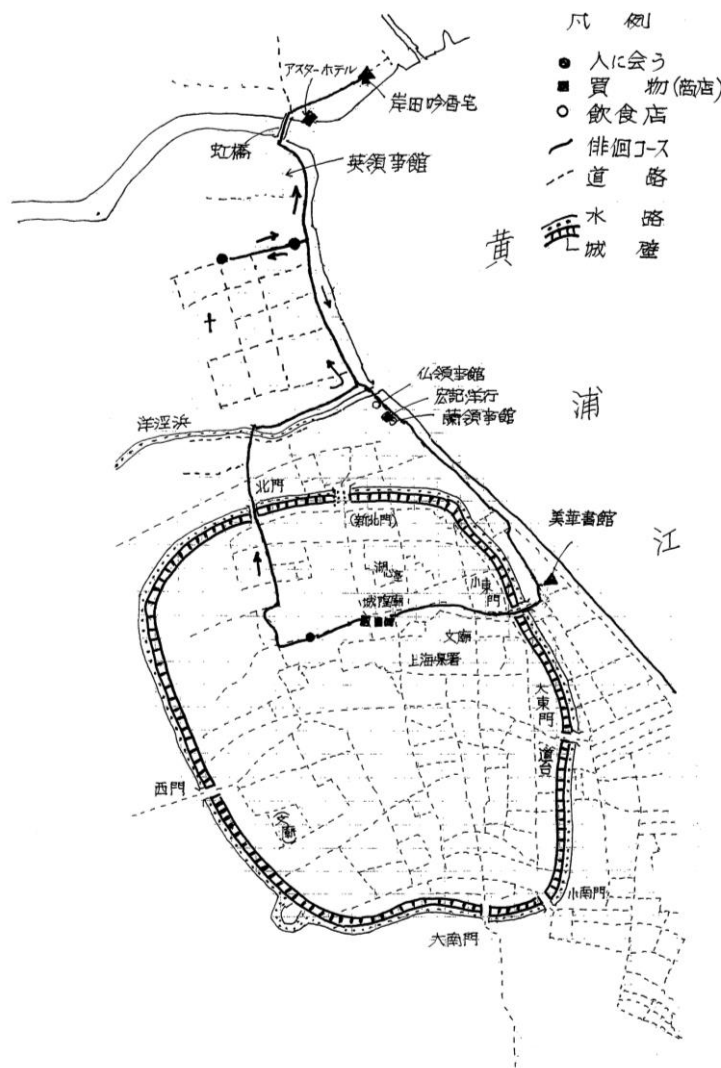


図2 慶応2年(同治5年)12月8日の徘徊コース

この後、吟香は涂子巢とともに老北門に向かい、大馬路の張魯生を訪ね、酒などのごちそうになっている。なじみの上海の文人たちとのつきあいが出来ていることがわかる。その虹口への帰路、横浜で火事にあつたので帰ってきたという南京人に出会っている。そして蘇州川を渡る虹橋の上から黄浦江を見た時、広い川の上に薄い煙が漂い、船の明かりがあちこちに見え、折からの月影も写り、しばし、その景色に見とれたという。日暮れ時の光景に吟香が幽玄の世界を感じたのだろう。絵心のある吟香ならではの感受性だったといえそうである。この日は、宿舎から岸边を南下し、美華書館へ。そこから城内へ入り、老北門から租界の商家や劇場が集まるようになった大馬路（後の南京路）へという新旧の両世界を巡るいわば上海の骨格の標準的なコースをとり、吟香はこの日の

そのあくる日から天候は悪化し、厳寒となり、強風や雪も降ったりして、吟香は石炭を焚いても暖かくなれないと記している。そんな雪の日、連日虹橋まで行って橋の上から黄浦江を見て、火船や帆柱の美しさを感じ、水がきれいだから、向こう側に富士山があれば「佳景だ」と絵心を記している。こんな時、ヘボンと会ったり、絵を描いたり、手紙を書いたりして過ごしている。

図 3 はそれを示した。この日は徘徊する吟香に次々と上海人側からお呼びがかかっている。まず新北門の橋の近くで紀樹齊に会々と、家へ連れて行かれ、画を見せてくれた後、竹画を 4 枚書いてくれといわれる一方、筆談で画も購入している。次に、長崎にいたという男の家で竹画を売ったり、男から絵を購入したりしている。さらに小東門への道で、来年正月に横浜へいくという男の家に行っている。このあと、美華書館と瑞興へよるが誰もいないので、陳有人という男と城内へ行き、印色盒(皿)を購入。また玉和堂で画の表具を頼んでいる。門外で皆と別れたあと、まだ帰ってこない弘光が滞在する諒記へ立ち寄り、それを確かめた後、帰宅している。

12月16日は、呉虹玉の結婚式に出席。式の様子が細かく記録され、吟香の興味を引いたようだ。ただ、この呉という人物が、吟香とどんな関係にあるのかは不明。これ以前の欠落した日記の中には記されているのだろう。式や祝宴に、吟香の多くの知り合いが出席しているのが記録からわかる。結婚式は19日まで続き、20日もまだその思い出に浸っている。21日は花嫁の里帰りの日としている。

凡 例

- 人に会う
- 商店など
- / 徘徊コース
- ↗ その方向
- - - 道
- ≡ 水路
- ▬ 城壁

アスター・ホテル
岸田吟香宅
英領事館
諒記洋行
仙領事館
宏記洋行
蘭領事館
美華書館
文庫
上海警察署
大東門
小南門
西門
北門
洋涇浜
黄浦江

15

門といわれる一門だけであったが、長髪の乱が起きるとフランス兵が軍の行動上、その東側に新しく造った門) 近くで書画や古道具をみて回り、今回は書店で本も購入し、読んでいます。

12月24日は、年末の雰囲気のためか、急に江戸の仲間たち、ふるさと美作の堺和(はが)での古い友人のこと、12月26日には、これまでどこで新年を迎えたかななどの記憶の記録が見られ、日本への恋しさに浸っており、12月28日には、11年前に作った詩まで思い出し、よく出来ていて、詩歌を読むのは風流なことだが、無駄なことだからうまくならなくてよいなどと記し、翌年には早く帰りたいと記すようになっている。望郷の念がわき上がっていくのもうかがわれる。12月29日は、ヘボンからの話と自分史を記し、「ままよ」でこの6、7年生きてきたから、一生「ままよ」で生きたい、と記している。

そして12月30日の大晦日、昨年の大晦日を思い出したり、江戸の仲間やイギリスへ行った連中がどんな大晦日を過ごしているかなど、友達の名を挙げて懐かしんでいる。しかし、現実には、表具師の許小亭が表装を持ってきたついでに、借金も頼まれ、貸してやったほか、凌蘇生とその姪には刺繍や画をやり、張地山からは紫檀の筒を買ってやったりと、完全に上海人のコミュニテイの中に入り込んでいる様子がうかがわれる。

なお、参考までに、この日書かれた日本の友達が居る地区とその人数を示すと、次のようになる。横浜、上野、作州、だんおん島、両国、秩父、イギリス、品川、池之端、日本橋などであわせて46人以上。彼らが大晦日の今夜、吟香のことを話題にしていることだろうとしている。上海にあっても、これだけの友達を思い出し、思いをはせることが出来ること、その地域の広がりから、吟香の人脈の広さがわかる。なお、イギリスは、幕府の派遣船の一行の中での親しく上海や江戸でつきあいがあって、イギリスへ行った連中である。いくつかの階層の人脈もうかがえ、吟香の人生史との関わりがわかる。

こうして迎えた1867年(慶応3年)の1月1日。外では爆竹、太鼓、小太鼓、銅鑼が鳴り、吟香は早起きをし、城内へ徘徊を始めている。まず、虹橋の上で東の方向を見、小東門外の美華書館へ。そこで黄延元、涂子巢、高鶴亭、銭兆熊、栽棠など20人ほどと新年の宴会をおこなった。この後、うち4人と曹素功宅へ向かうと、息子と親父が誘い入れ、茶菓のごちそうになっている。そして城隍廟の中へ入り、橋を渡り、山へ上り、曲がった橋を渡り、湖心亭で飲茶。そこで2人と別れ、子巢と2人で葛芝眉宅を訪れ、酒とまんじゅうをごちそうになった。あと老北門外で子巢と別れ、帰宅している。このコースではまず、英華書館に敬意を表し、新年の会に参加して、後は親しい上海人の知り合いと日本流に言えば寺社詣でをしたということであろう。コースもこの時期としてはすでに慣れた道を徘徊したといえる。

翌2日から4日は、新年の年始回りの来訪客が吟香宅へ次々とやってきたり、誘われたりし、吟香はかれらに竹画を描いて渡し、6日まで竹を描いている。そのためか面白くない正月だとし、6日の午後は美華書館の3人の関係者と大馬路まで行って飲んでいる。

1月8日はまた雪、作州を思い出している。翌9日、かつてアメリカにもいた待望の弘光が香港から朝鮮の事件のニュースを持って帰ってくる。それについては、前述のようなヘボンとの話が行われた。弘光は13日に吟香の所へやってきて、ほぼ一日中面白い話に花を咲かせた。

1月14日。吟香は15年前の新聞紙上に日食の図を見つけ、作州での体験を思い出し、支那でも場所によって、日食の形が違うこと、それは見る位置によって違うのだと理解し、北京や日本各地の緯線についてほぼ正確に示し、地球や天文の基礎的知識を持っていること

がわかる。そしてその後、また徘徊をしている。

図 4 はそれを示した。出発のあと、アスターハウス前で弘光に会い、二人で徘徊している。まず小東門外の瑞興で学松に会っている。学松は下旬に横浜へ行くとのことで、吟香は



図 4 慶応 3 年(同治 6 年)1 月 14 日の徘徊コース

の一行で、すでにアスターハウスに泊まっているフランス船で来たフランス行きの一行とは別であった。フランス行きの連中を見ると、仙さん、うささん、季六さん、山内六三郎ら知り合いの日本人が沢山いると記している。吟香の人脈の広さと深さがうかがわれる。

このフランス行きの一行と上海行きの一行が、この日奇しくも同じ日に上陸し、一緒になったことがわかる。フランス行きの一行は 17 日には出航するが、吟香にとって多くの日本人が上海へやって来たので、心高ぶったに違いない。

ところで、フランス行きの一行は、ナポレオン三世がパリで開催する万博から、幕府への参加の要請に答え、あわせて幕府の存在の正当性を広く世界に知らしめるべく、徳川昭武(14 歳)を代表として組織された 30 人あまりの徳川遣欧使節団であった。吟香は代表の若い徳川昭武を「みんぶさま」と称し、利発そうな人物だとしている。徳川昭武の水戸藩に出入りしたことのある吟香には、親しみを感じたのだろう。また、「おぶぎようさま」は向山

日本への手紙を託すことにした。いわば個人郵便である。美華書館は誰もおらず、城内の詹大詹利で曹奏功にあいさつし、許小亭と湖心亭で茶を飲み、古道具屋を巡っている。後、小亭と別れ、墨を求め、老北門へ。古薫舗で墨と竹を見、弘光は図録を購入。弘光の宿舍涼記で弘光の所蔵字画を見て関心。帰宅したあと、弘光がまた訪ねてきている。この日も慣れたコースであった。

②日本人が来た

翌 1 月 15 日は、いくつかの用件があった。一つは前述したミカドが崩御したという手紙がへボンへ届いたこと。二つはアスターハウスに日の丸の旗が立っていたこと。そして帰路のアスターハウス前に 8~9 人の日本人がやってきたのを見ている。その中には吟香の顔見知りの鍋木立木と高橋怡之介がいた。かれらはイギリス船で来た上海行き

一履、「いわみさま」は山高信夫、「ひびのさん」は保科俊太郎、「たなべさん」は田辺太一、「箕作の貞さん」は箕作亭一郎、「いくしまさん」は生嶋三郎、「やまうちさん」は山内六三郎、「季六さん」は喜六、よく登場する「うささん」は清水卯三郎のことで、吟香流の呼称である。「うささん」と親しく記している清水は、出品担当の横浜の商人で、そこで吟香とつきあいがあったと思われる。

一方、上海派遣団は、1882年の千歳丸でやってきた第1回以来、3回目で、清国との貿易を切り開こうとする目的であった。乗船者には、第1回目にも参加した元気者の名倉予何人（浜松藩）⁽¹⁹⁾のほか、八木財治（田原藩）、串戸五左衛門（佐倉藩）、鍋木立本（佐倉藩）、高橋怡之介（佐倉藩、のち高橋由一）など9人であった。一行は、アスターハウスが一杯だったため、弘光の世話で小南門外の王仁伯の邸宅に宿を頼んで宿泊することになった。この後、上海派遣団としては、初めて南京にまで船で出かけている。帰国後、一行のうち名倉は、さらに中東経由でフランスまで出かけている。

この夜、早速アスターハウスへ行き、「うささん」、「きろくさん」、「せんさん」ら5～6人を連れ、虹口の町を案内し、靖遠街という花街もひやかに歩いたとする。また「うささん」からは火災を免れた話や故郷の人たちの話を聞いている。

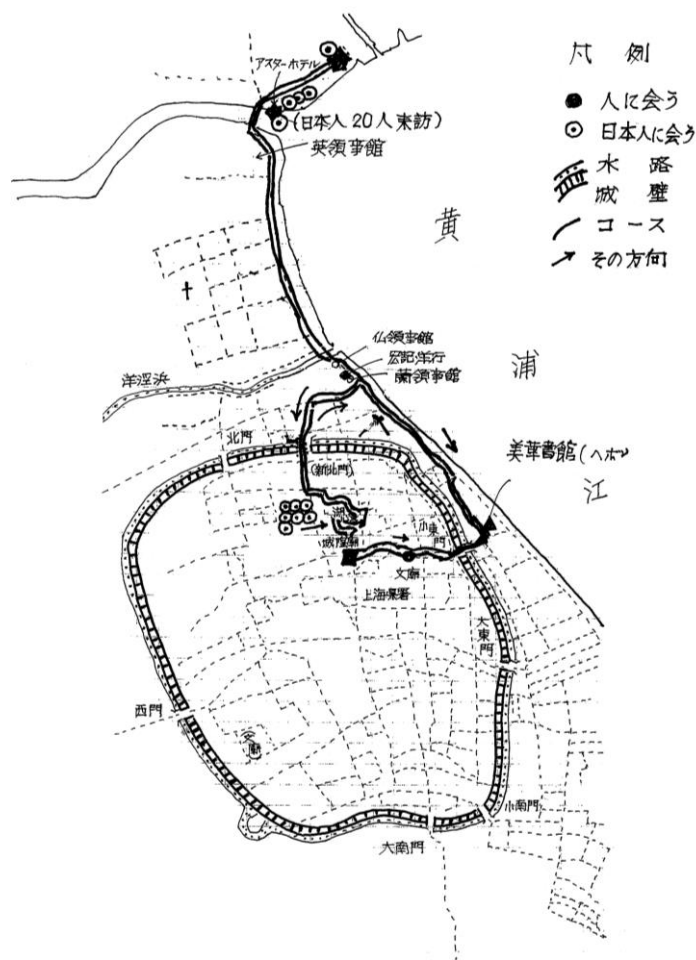


図5 日本人を案内 1月16日の徘徊コース

この日の3件目は、新たな下刷りの校正を頼まれている。吟香としては、多くの日本人が来たことで、校正も落ち着かなかったことだろうと思われる。

翌16日は、早速忙しくなっている。フランス一行は、上海での自由日はこの日しかないためだろう。「仙さん」と「うささん」を誘い出して見物に行こうと思ったら、外国奉行の日比野さん、同通弁の山内さんらに頼まれ、「せんさん」は都合でいけなかったが、皆を案内した。呉淞の河岸（かし）を小東門街まで歩き、美華書館のガンブルに会い、酒を振る舞われ、次いで城隍廟を見て、新北門からアスターハウスへ戻るいつものコースを案内している。そして戻ると、奉行の向井と石見守、田辺などの役人6～7人が、や

(19) 前掲(9)。

はり案内を依頼してきたので、新北門から小東門へ抜けるさきほどの反対コースをこの2回目は急いで案内している(図5)。「みんぶさま」がフランス領事館から招待され、みんなそれに同行するからだという。途中、城隍廟を歩くとき、一行から、なんでこんなに汚く、悪臭なのかと声を上げ、びっくりする様子が記されている。

しかし、アスターハウスでの、日本人一行が飯を食べる光景を見た吟香は、肉を食べる手つきのおかしさ、騒がしく、やかましくて、行儀が悪いのを見て、日本にも茶の湯の礼や小笠原流があるのだから、西洋飲食の礼も習うべきだとしている。

また、遅く戻ってきた「せんさん」に理由を聞くと、城隍廟から湖心亭、料理屋と歩き回り、芝居も見て、ガンブルのいる美華書館で活版化作業も見えてきたという。一行とは別に一人で自由に歩き回ったということに、吟香は驚きいりました、と記している。

なお、前夜に吟香は自分の日記を「うささん」に貸したら、役人たちに見せたようで、面識もない侍からも吟香先生、東洋先生、国華先生と呼ばれたという。この見せた日記は第1冊だったことが考えられ、このあとすぐ出航することになる彼らとともに、フランスまで行ってしまい、その後不明になってしまったのではないかと気になるところである。

1月17日は、朝、紙を買いたいという渋沢徳大夫を案内して、三馬路は出かけ、帰ってくると皆フランスへ出航の準備中。吟香はいっしょに行きたくてたまらなかったと、残念が

っている。知り合いも多く、この数日でさらに親しくなった思いからであろう。

日記には、彼らから得た情報も書かれている。

1月18日と19日はまた元の生活に戻り、仁圃先生などと交流している。

そして1月20日からは、王仁伯家に宿泊している上海派遣団の日本人との交流も加わり、忙しくなる。

1月20日、弘光と王仁伯家へでかけ、高橋、鏑木、串戸、名倉、八木ら9人と会い、皆見識があり、面白い話ができることから、吟香は皆英雄だと記している。そして昼すぎ、日本人一行を案内し、城内を巡り、何人かは画や古印を、吟香は磁碗を求めている。施相公衛のところまで皆と別れ、吟香は黄雲山の所へ出向いている。公は朝から待っていたと酒や飯を用意、70幅の書画



図6 1月20日の徘徊コース

や歴史物の合戦図などを見せられ、歴史物の中によいできの作品があると評価している。黄雲山は吟香が書画商としては信頼している人物なのであろう。そのあと、黄雲山の家に泊まっていけというのを断り、王仁伯家で泊まっている（図 6）。そして日本人が持ってきた手紙を見て、情報を得ている。

翌日からは、吟香の所へ詩画が持ち込まれたり、弘光や石川が来訪してきたり、手紙を書いたりと雑用的な日々を過ごしているが、1月24日には、吟香がまじめだと評している仁圃先生が「江南鎮涙図」という絵と書を2冊送ってきたので、それを読み、7～8年前の長髪賊の乱のことを知った。彼らは明の時代を復活させるといって、各地を荒廃させた賊であり、江南もかつての沃野が荒廃し、廃屋、雑草、獣の天国へと変わった。そんな中、上海は英米などの外国軍が守ってくれ、街に賑わいを取り戻したことが書かれていた。ちなみに湯先生（ここに吟香が投宿していたようだ）の話だと、先生のところの乳母は蘇州にいて、人々が次々と殺される中で、14人の親子の中で一人だけ助かったが、家もなく先生宅へ来たのだという。吟香は「支那人の政事の不器用さ」を主張している。

1月27日は「どんたく」（休日）。あそびに出たいと思っていると、葉生が来訪し、城内行き誘うので、諒記へ立ち寄り、弘光とは王家の近くで待ち合わせることにし、葉生と城内

へ。まず仁圃先生宅へ寄った後、葉生は道に迷い、迷惑なことだと、そのことに吟香はびっくりしている。結局、小東門を出て、蟾客と筆談。再び廟内へ戻り、逸雲と汚い家にすむ懷郷に会えた。そして小東門外的美華書館でガンブルから食事をもらい、そのあと葉生とわかれ、瑞興から黄雲山へ。そして2人で王仁伯宅へ。夜は一人、瑞興で飯を食べて帰ったが、途中灯籠を持った男がさかんに花街へ勧めようとした（図 7）。道に迷わされたせいか、この日は何が楽しかったのかはわからない。しかし、上海の書画家とは着実に普通につきあいが出来ていることがわかる。

この日の日記の最後には、上海に来た日本人について、吟香がその先駆けで、次いで弘光、次いで川路、中村、と順に、しかも数が多くなって

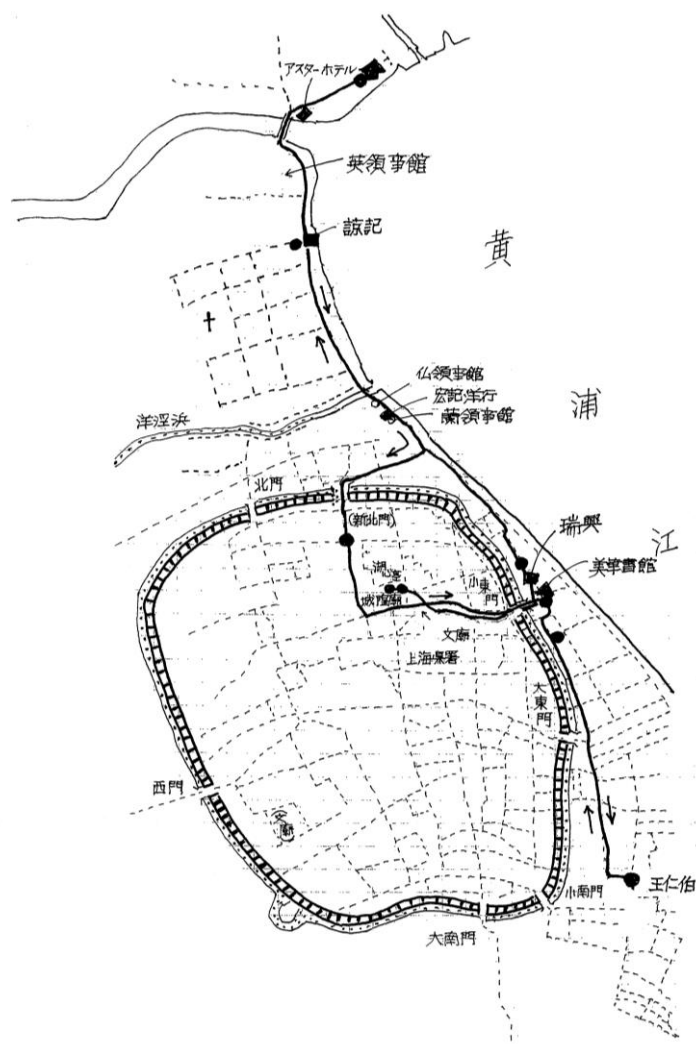


図 7 1月27日の徘徊コース

いくのを示した上で、いつも日本人がここへ来ると「おいら」の所へ来る。心やすさもあるが、日本国中のひとを知っているわけではないのに、どういうわけか、と記し、急に多くの日本人ともつきあうことになったことの自負心と戸惑い感を吐露している。

1月28日も徘徊が続く。仁圃先生の所へ土産を持ち、丁介生と共に向かう。新北門から入ると、先生が出迎えてくれ、すっかりごちそうになり、酔ってしまう。その後、敬業書院を訪ねるが、黄永涂は不在。代わりに子厚と筆談。彼の叔父が狂言作者で、演戯を見ることを勧められ、老化門から馬路にある芝居を初めて見ている。宋の故事の芝居で、身振りところわ色は日本に似ていると高橋は喜んだと記している。帰路、蘇州橋の上で黄永涂に会い、自宅まで連れてきて筆談をした(図8)。同行した高橋は吟香の家を、大名のようなよい部屋

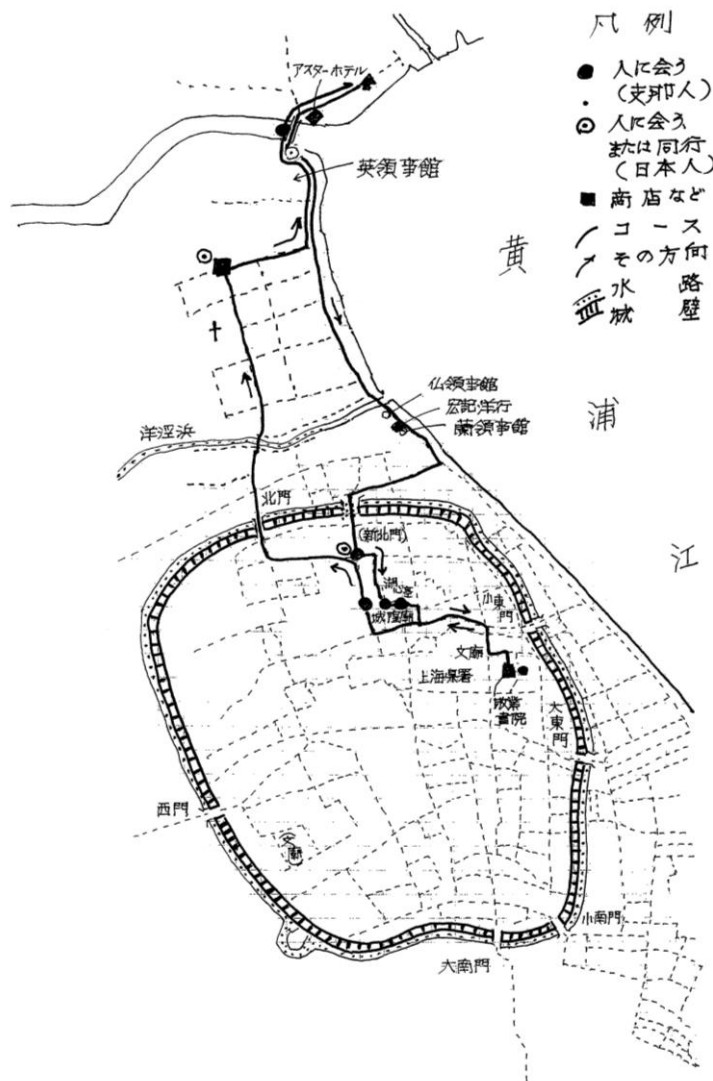


図8 1月28日の徘徊コース

う。そこで弘光と曾根の3人で城内の曹素功宅で筆談。次いで仁圃先生宅へ行ったが、留守なので姪と筆談。帰宅すると、酒持参の弘光がやってきて泊まることに。この日の小南門から城内へはそう多くは歩いていないコースだが、すっかり慣れた感じで徘徊しているのがわかる(図9)。そして吟香のお気に入りの上海人が仁圃先生だということもわかってきた。しかし、残念ながらこのあとの2月分は、日記を欠くためわからない。

だと評したという。高橋が宿舎にしている王仁伯宅は9人も泊まっているから狭いのだろう、とは吟香の解釈。

翌1月29日には、また、アスターハウス前で、今度は土佐藩のイギリス行きの一団6人に会っている。うち横浜にいた大庭源次兵衛を吟香は知っていた。松井修助は土佐紹介の貿易商。吟香は自分も行きたいと羨ましがっている。

翌1月30日は、八木と弘光とで三馬路へ行き、八木は詩箋を100張購入。八木に絹地の画集を貸してあげている。

2月は5日までしか日記がない。その5日の日に吟香は徘徊している。朝、仁圃先生から高橋への手紙をもらい、弘光が連れてきた曾根曾根之介という宇和島藩の17歳の少年もつれて美華書館へ、さらに高橋のいる王仁伯宅へ。寧波から日本語の出来る商人が来ていて串戸、鐮木、名倉などみな絹を買うなど忙しそ

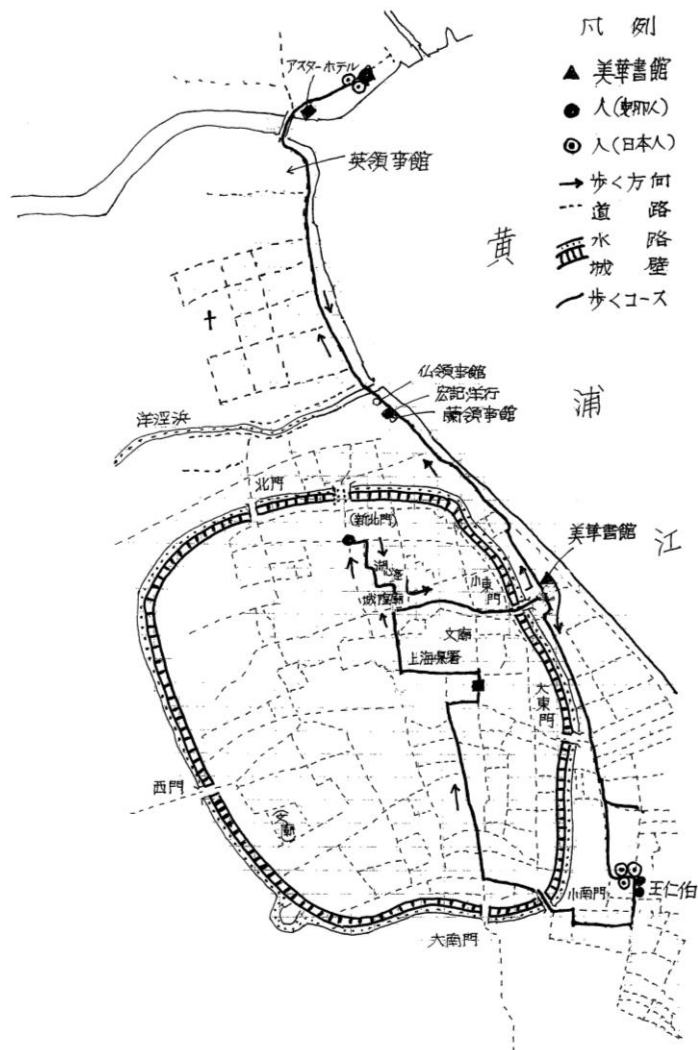


図9 2月5日の徘徊コース

③交流の深化と辞書の完成

日記は3月分の第5冊として存在する。その巻頭に簡単な序文が記され、吟香が自分の経験を記すということで、これまでの経緯から日記が他人に閲覧されることを多分に意識して書いているように思われる。

2月分を欠いた分、3月は花を愛でる吟香にとって、春を実感できる喜びと、近づく辞書の完成と見えてきた帰国への期待に、日記も明るさを増している。

3月の1日は「清明」の日で始まる。庭の花を花瓶に飾って、花の名を知りたがっている。翌2日には朝から行水をし、ひげを剃り、使いにきた小僧が頼まれてきた借金に、気前よく200文貸し与えている。そして弘光とイギリス領事館へ行き、森龍玄に会い、諒記へ。そこで弘光へ届いた手紙から、

日本で江戸方が負け、江戸で供養が行われたとの情報を聞いている。

3月3日は「節句」。英領事館から森龍玄を誘い出し、亀有もつれて北門から城内をめぐり、曹素功で筆を買った後、涂菓巢に出会ったので、また店に戻り、小筆100本、大筆4本をあす広東へ旅立つ森用に注文。再び廟内へ戻り、湖心亭で茶とまんじゅうを味わい、「節句」を祝っている。あと北門で道士の祈祷を見、その様子も活写している。そのあと子巢と別れ、3人で新北門外の書画屋、さらに紀樹齊へも寄っている(図10)。吟香の行動から上海人と日本人を平等に、しかも当たり前につきあっている様子がわかる。

翌4日、朝から仁圃先生来訪、地図は西洋のが一番だというから、日本にも最近よい地図が出来ていると答え、吟香はこの時点で地図にも関心を持っていることがわかる。あと凌蘇生が来て、約庵が描いた竹画を見せたので、吟香はにせものかとも思いつつ購入したようだ。夜、弘光はその画を褒めている。吟香は竹画には目がないということだろう。

3月5日は、また早朝から曹素功へ出かけ、注文した筆の確認をし、小東門外の紙屋で紙を購入。この紙屋の前は魚の朝市が盛んだと、魚の種類や漁師についても好奇心旺盛で記している。この付近には今も魚の通り名があり、おそらくその場所だったのだろうと思われる。あと近く的美華書館へ行き、涂子巢から扇子をもらっている(図11)。

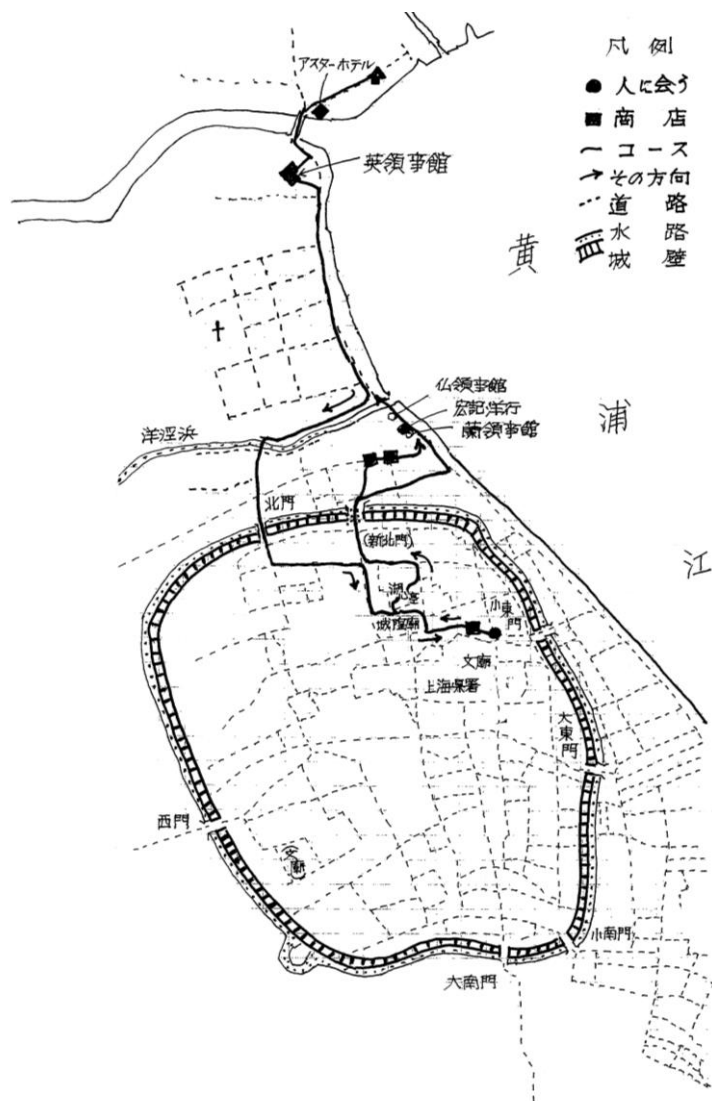


図 10 3月3日の徘徊コース

座元がしっかりしているから、衣装も道具もいいと記している。炭気灯に灯がはいる頃、栈敷は一杯になり、めでたい踊りと歌から始まり、あと幽霊劇もあったという。俳優は皆女だと。日本でいう女歌舞伎であろうか。客は女連れが目立ったという。気に入ったのか、吟香は筋書きも記している。この日は東来行泊（図 12）。

3月10日は、また仁圃先生を訪問。土産に先生に書を色々書いてもらったりしている。そしてまだ書いてもらうためか紙屋、筆屋、また書画屋をまわり、帰国土産を考えはじめたようだ。廟の裏門で同じく土産であろう印材を沢山求めた田原藩の八木に会い、一緒にまた仁圃先生宅へ出かけている。八木が去った後、一人、にうめんをごちそうになって自宅へ帰っている。

3月11日は、ヘボンの「おかみさん」が日本行に乗船するというので、お別れに行っている。辞書がほぼ完成し、吟香も帰国が近づいてきたことを実感したに違いない。翌12日には、出航を見送りに行き、いつもの田舎道を帰り、農家へ立ち寄ると、ヘボンも後からついてきて一緒に帰ったという。二人とも寂しさを感じたに違いない。しかし、放置された棺桶を見て、その理由を議論して、現実に戻っている。翌13日は、ヘボンも寂しいのか吟香

3月6日は、竹を書こうとしたら植木屋が来たので花2盆を買っている。部屋の春らしさを演出したのだろう。あとは英華書館で仕事。そしてこの夜、英和辞書が初めて形になって出てきたと事実のみ記している。

3月7日は、黄雲山に会い、李芝齊とも筆談、山水画そのほかを沢山見せられたが、皆偽物だろうと手を出していない。吟香を客として画商たちが狙っているように見える。

8月8日は日本の知り合いと手紙のやりとり。翌日には二人の日本人から手紙が届いていて、手紙のやりとりはかなり活発になっている。そしてこの9日、諒記へ寄り、弘光と一緒に新北門外の古道具屋をひやかし、東来行へ一人で行き、みんなと酔いが回るほど飲んでいる。その勢いでか大勢で芝居に出かけ、大きな劇場へ入っている。座元はイギリス人、俳優は支那人で、



図 11 3月5日の徘徊コース

と雑談をし、夢を食うという
 獺のはなしをしている。

3月14日、吟香は近所を歩き、羊を家まで引く人、赤ん坊を抱く人、田を掘る人、桑をとる人、蚕飼育を手伝う人、空豆の実がないのを卵とじにして食べる人、などの人間観察をしている。吟香が始めたという卵かけご飯はこんな観察から生まれたのかもしれない。そして、いつものように弘光が来訪するが、吟香は「おかみさん」が今頃船酔いをしているのではないかと、とか、フランスへいった連中は着いたか、などと思いをはせている。

3月15日、梅祭りだが、霞がひどいと。黄砂だろう。朝から凌蘇生来訪し、話をする。ヘボンが辞書の「序」を書いている。いよいよ辞書も最後に近い。夕方、また、廟を抜けたところの詹大有で書画墨を求めている。帰国の心の準備が本物を求めようとしているのだろう。

備が本物を求めようとしているのだろう。

3月16日、黄近霞のところへ行き話す。笛を吹き琴を弾いて聞かせてくれ、『博物新論』や『地球説略』、『婦嬰新説内科新説』などの吟香の関心分野の本をもらっており、寝る前に『博物新論』を読んでいる。いずれも後の吟香のこの分野の出版に影響しているように思われる。

帰宅後、近くの花街を通った時、女たちが並び、「スケベ」と呼ばれ、日本人が来て教えたなとその雰囲気を感じたようである。

3月17日、昨日の約束でまた黄近霞に呼ばれ、昼飯をごちそうになり、お礼であろう曹嘯雲に竹画を4幅書いてやっている。あと弘光と新北門外の道具屋をひやかし、一人で古玩屋へ行くと、吟香が書いた竹画が青絹できれいに表装され、4円で売られているのを見て、もうけるやつがいるかと、店に自分の竹画だと名乗っている。あと仁圃先生は留守。廟の北横町の書画店では目指す作品を買えず、そこにいた男は字も読め、宝泉人だといい、にせものばかりすすめるという。吟香を朝鮮人か琉球人かと思っているので、日本の主皇は2584年目の万世一系だと教え、紙も買わないと、相手は不機嫌になったと。あと東来行へ行くと李芝齊が2階での盃に誘うので、上がると黄雲山や福建の商人、満州人など6人がいて、

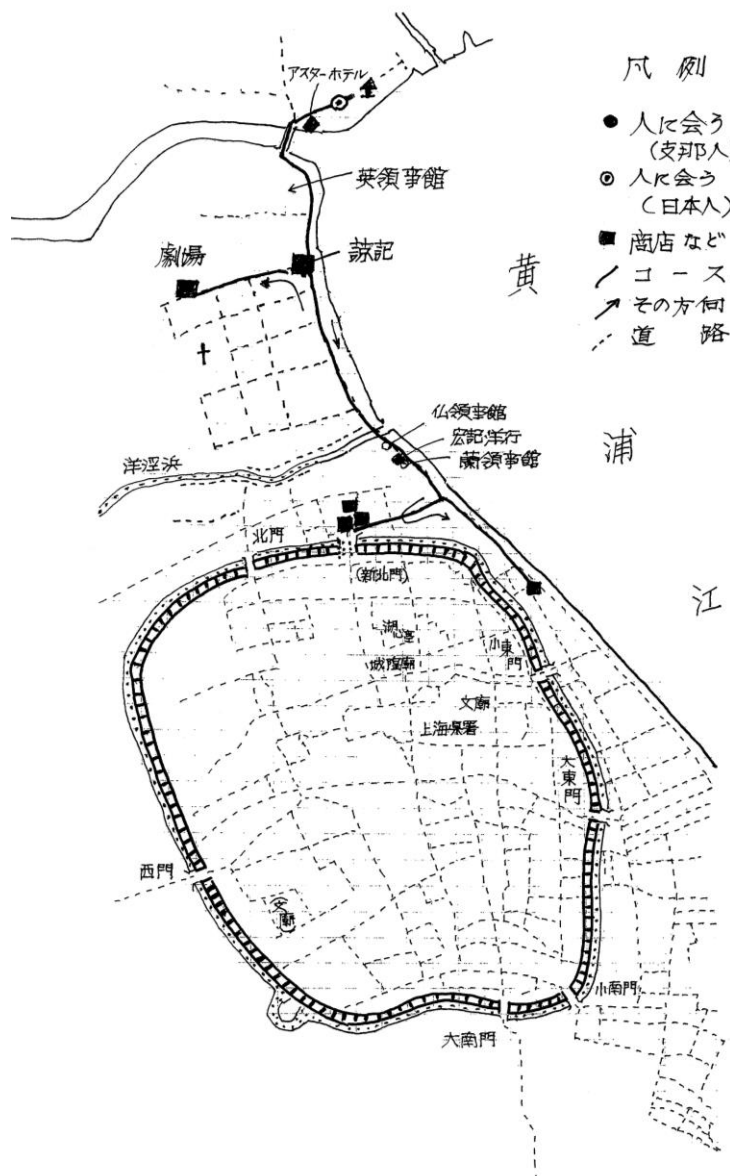


図 12 3月9日の徘徊コース

胡弓、笛、歌で賑やかな中、酒やごちそうになっている。帰宅後、竹鼎が来てまた話をし、詩を作っている。吟香の上海人とのつきあいが、また深まった一日であった（図13）。

3月18日は竹画を描き、翌19日は丁介生から所望されていた竹画を14幅渡している。また宋蟾客へは山水画を4幅渡し、商売の話を筆談した。その時、王仁伯の家に泊まっている日本からの連中は、貿易の目的で来ていることを知らされている。

3月20日も朝、竹画を依頼された紙や扇に描き、窓の外を見ると柳の花が雪のように風に舞っているのをこれを何とかと人に尋ねたが答えがばらばらであった。美華書館で子巢に会い、東来行へ行くと、黄振篆という男に会い、明日横浜へ発つというので、海屋へ手紙を届けてもらうことができた。学松も明日長崎へ発つと記しているから、上海と日本の間はこの時代、と

くに上海人にとっては普通の往来があったこと、それだけにこれらの人物に手紙を託すことで情報交流が出来たことがわかる。吟香の竹画の上海人へのプレゼントはそのための直接、間接のネットワークの条件にもなっていたように思われ、吟香もそれを肌で感じていたように見える。

3月21日、午後、諒記へ行くと、弘光が香港へ明日出発の準備中で、そこに昨日会った蘇我弥一がいて、インドで日本の女が三味線を弾いているのを見たという。インドの話もびっくりだが、そこに日本の女がいたという話もさすがの吟香でも驚いたのではあるまいか。イギリス領事館へ行っても会えなかった森竜玄が来訪し、香港はイギリスの管理下にあるから、水も良く、行き届いている。しかし、広東は始末に負えないほど上海より悪い。人が多く火事場みたいだから行かなくてよい、などと香港、広東の様子を語ったことを記録している。その香港へ弘光も行くのだというから、うらやましく思ったことだろう。しかし、この時期、インドや香港を行き来する森や弘光が何者なのかは記されていない。吟香とは違っ



図 13 3月17日の徘徊コース

用客気」と言って 2 ドルだけ引き抜いたので、時に支那人は妙なところでこの言葉を使うものだとして記している。印象的だったのだろう。

この日、ヘボンに頼まれ、日本のかな、万葉かな、カタカナ、ひらかな、いろはの五體字の版下を書いている。辞書完成も後わずかとなった感触のようだ。

ところで、この日、珍しく、支那人のおかしな点をあげて記している、すなわち、女の足をしばること、男の髪の毛（弁髪のことか）、アヘンを煙すること、靴の頭が上を向いていること、爪が長いこと、の 5 つ挙げている。この時期に吟香の人々に対する観察がまとまってきたということだろう。ところで、1882 年に千歳丸で上海へ来た日本人の頭を初めて見た上海人が大笑いし、その上海人の頭を見た日本人も大笑いして、ともに大笑いしたという記録がある⁽²⁰⁾。吟香を含め上海人の日本人への感想も知りたくなる。

3 月 23 日。ヘボンからよい辞書名をつけてほしいといわれ、『和英詞林集成』と命名し

て海外で自由に動く日本人がいることを知り、吟香はまだ見ぬ広い世界の魅力を心にとめたことだろう。

3 月 22 日、朝、黄弁升が章筱珊という男を連れてきて、この男が長崎へ行くから手紙を届けられるとのこと、そこで渥美新作宛ての手紙を依頼。男には蘭と竹画を渡している。あと裏の畑を歩いて、知り合いになった子供とヒキガエルでと遊んでやる。その家に行くと、吟香は「ぎんこ」と呼ばれる。ここでも名が知られている。中へ入ると支那人やイギリスの子がいたりして、座るところもなかったが、顔永経が顔を出し、「よくきた」といって、彼の良い座敷でお茶をごちそうになる。彼はこの家に部屋を借りていて、アメリカのリンカーンの写真を見せてくれた。大柄でやせていたとメモ。

夕方、凌蘇生が蘆雁を持ってきたので、2 ドルを赤い紙に包んで渡そうとしたら、「不

⁽²⁰⁾ 前掲 (9) の①。

た。いよいよ辞書も最終段階だ。そこで、早く帰れそうだ「うれしいね」と。また、昨日、吟香がアスターハウスに日本人 2~3 人見たとヘボンに報告。会ってみたいと記している。望郷の念か。

3 月 24 日。川岸を南下し、日本人をさがすと、柳川藩の蘇我準造に会う。昨秋から船で遊び歩き、シンガポールなどへ行った話を聞く。一緒に東来洋行へ寄って船賃を聞き、次いで仁圃先生宅へ。そこには吟香の書 4 幅と竹画 4 幅が立派に表装され飾られていた。さらに廟へ行くと八木と高橋に会ったので蘇我を紹介したが、小東門で八木たちに別れ、軋拉仏の家へ（図 14）。そこで蘇我から、香港で日本の軽業、手品師が大入りの中で演じていたとの話を聞いた。そのほか話の中身は、疲れたので日記には書かないと記している。なのに、その後、裏門から出て寧波人の店へ行き、周良弼という儒学者らしき男と筆談。これもここには書かないとしている。疲れても人と話したい吟香の性格がうかがわれる。

3 月 25 日、いよいよ命名した辞書の扉絵のタイトルの版下を書く。この最後のときに、「詞」の時を「語」に変更し、『和英語林集成』とした。最終決定である。吟香らしく 1 厘

値上げしたという。そしてヘボンから手伝い料としてここで 50 枚（ドル）を受け取っている。雇い人レベルの手伝い料だが、これで辞書づくりはあと印刷と製本を残すだけになり、吟香の役割は終わったことになる。

あと、黄雲山が夏白布、涂子巢からは乾隆帝が書いたという書幅を売りに来る。吟香の帰国が近いことを知り、それぞれがとっておきの逸品を吟香に売ろうとするのだろう。吟香はその値段が高いとだけ書いている。

3 月 26 日。ヘボンから来月 23 日に日本へ帰ると伝えられる。とたんに早く帰りたいと思ったことだろう、急に支那は食い物が悪い、人に礼儀がない、むさくるしいので、閉口だ。上国でも下国でもなく、中国とはよく言ったものだ」と記し、そのあと、蘇我が話した天竺について、裸と体、食物、家、牛、器、食事、洗



図 14 3 月 24 日の徘徊コース

濯、天気、服飾、女郎屋、産物、階層などについてまとめている。ただ天竺も広いから、皆その通りではないだろうとコメントも付している。

3月27日、蘇我準造が来て、吟香に対して、竹など書かずに書物を出した方が世に役立つのではないかと、といわれ、今は人に頼まれたり、面白くないから竹を書いているが、日本へ帰ったら書物を編みたいと答えている。そして日記の中にその構想内容を記している。そしてそれは実際、その後次々と実現していくことになる。蘇我準造という人物の吟香を見る目の確かさと、それによって、吟香の中に、新たなエネルギーがより具体化して生まれたことがわかる。

3月28日は体調不良としながら、頼まれた竹画を12～13枚描いている。3月23日には、蚊がすでに出て蚊帳をつったとあったが、この日は蚊が増えたとある。湿地の多い虹口の場所柄があるだろう。

3月29日も風と竹風画を7～8枚描く。葉曾魯が来て明日吟香を招きたいとの伝言。

丁介生が蘇州から帰り、常州へも行った時、琉球だと思われる中山王が北京へ行くために常州を通ったと話した。日本人を琉球人と間違えられる理由でもあろうし、薩摩のもとで琉球の朝貢も行われていたのだろう。

4月1日、暦は夏、早起きして、水で体を洗い、洗濯した手の着物を着、部屋の掃除をしている。丁介生が常州土産を持って来る。あと蘇我も来訪、頼まれていた扇画を渡す。蘇我とアスターハウスにでかけ、薩摩の14、5歳、越前の20歳など若い4人が来ているのに会い、イギリスへ行くなら友達がいるから、あとで会おうと伝え、2人で新北門のろうそく屋へ行き、主人や客と筆談。あとは自分一人で書画屋をいくつかのぞき、西洋物店で日本の歯磨が売られているのを見ている。上海商人による取引品だと思われる。さらにこのあと、蘇我の居宅である軋拉仏で話をし、この家のかつて長崎にいた商人が竹画を描いてほしいと所望される。

その後、諒記へ寄り、呉廣芝が八木さんからこの刀を吟香へ渡してほしいと言い残して、本日日本へ帰国したという。高橋、八木、串戸、名倉なども一緒に帰ったことをうらやんでいる。高橋には帰国する前に来てほしいといったのに、蘇州河の橋を越えるのが大変だと断られ、ややショックを受けている。楠木へ金を貸してくれといったのが徒になったかもとみている。高橋は吟香の家にもきており、しかも武士ではないので、吟香としては一層期待はずれで、がっかりしたのであろう。

4月2日。朝、日本からの手紙を瑞興の学松が届けてくれる。江戸大天満の高木五郎兵衛、横山町の近江屋伊平、横須賀の小林屋ほかなどからで5通、海屋からは来ず。3月22日と24日が差し出し日なので、8～10日で上海へ届いたことになる。内容は書画や筆墨などの注文が多く、火事情報も含まれている。

あと涂子巢が来たので2人で張魯生宅へ。本人は留守だが二人の弟がいて、学問も少しあるので、支那の医薬と書物のウソばかりのことを互いに話し合う。支那では親や子が死にそうでも医者にみせず、神や道士に頼み、死んだ後、医者にかかるという。ほとんどの医者は貧乏で上手ではない。日本の医者のように病人の家にまで診察に行くことはないなど。あと、廟の中での蘭花会を見て良い出来だと。吟香は花や植物が好きだ。そして湖心亭にのぼり茶菓子を味わう。葛芝眉も尋ねるが、いなかったのが、途中、水盆を選びながら、小東門を抜けて曹曾功のところで墨造りを見、材料を勉強している。このあと瑞興で飲み、帰宅。今日も良く動いて多くの人たちにも出会ったが、慣れたコースでの新たな出会いが多かつ

たといえる。

4月3日。蘇我は香港へ出発。松筠に書画4幅やる。万祥号へ寄り、張船山の事蹟4編を買いたいというと、珍品だからだめだといわれた。そして2人の男がほかの家に連れて行き茶菓子をごちそうになりながら、ほかの古道具屋が持ち込む書画を見、交渉が上手だと言われながら、書簡を一つ購入し、書舗春江で書も購入している。へボンからもらった手当が購買欲を高めたように見える。あと朱菓齋からもらった吟香を賞賛する手紙を全文記している。うれしかったのだろうし、のちに日記を見る人へのアピールかもしれない。

4月4日、朝、凌曾生が来て子興の所へ一緒にあそびに行こうと言ったまま呼びに来ない、という内容で日記が途切れている。この日も元気に徘徊しようという気持ちが伝わってくるだけに、この後の記録の読めないのが残念である。

4. 吟香の上海での軌跡から

(1) その空間

以上、吟香の最初の上海における空間行動を、残されている日記のすべてを示すことで明らかにした。前述したように、吟香は上海滞在中の半分近くを冬の季節を含め外出している。

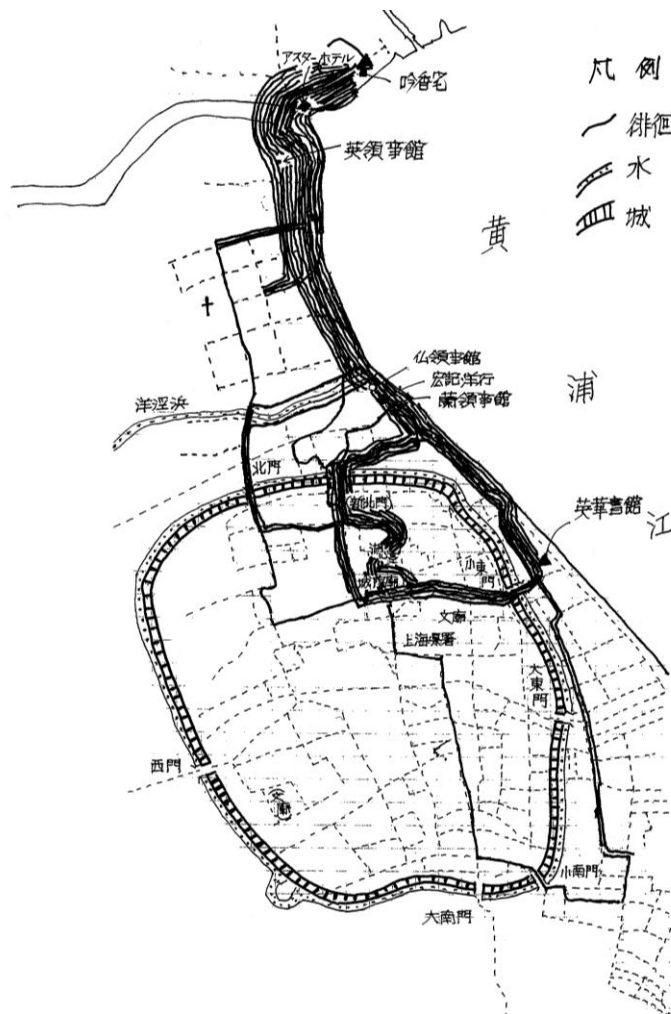


図15 日記に記された12月～1月の徘徊コース

へボンのいわば助手としての作業は最も重要で、虹口地区から小東門外の印刷所である英華書館は当然ながら吟香の行動の拠点であり、へボンだけでなく、責任者のガンブルとも交流し、作業がなくてもほぼ毎日立ち寄っていると思われる。しかし、この日記に関して言えば、へボンとの関係記事がきちんと記録されているのは、延べ22日で、その内で校正に従事したという明確な記録は5日ほどしかない。へボンとどのように作業を分担したのか、その中で吟香がどのような作業をやったのかは、とくに前半期の日記を欠いているだけにわかりにくいところもある。残されたこの記録の上からの負担を見れば、吟香の自由時間はかなりあり、自由人として上海を徘徊していることがわかる。

その自由な行動軌跡をとく

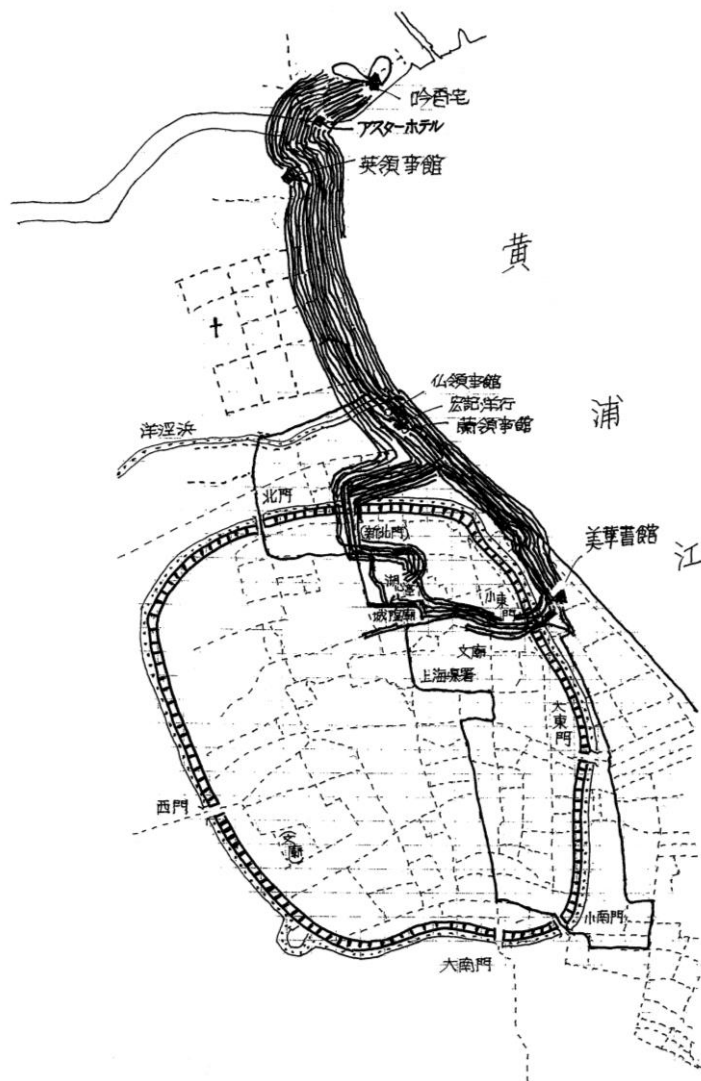


図 16 日記に記された 2 月～4 月 3 日の徘徊コース

に動きが著しい日を抽出して、地図上にそれぞれわかる範囲で示したが、基本的には起終点が吟香の宿舎。これは米租界でまだ十分開発されていない田舎の残る虹口にあり、そこから南方にあるフランス租界の南端部にある仕事場の小東門外の英華書館へ通う。そして自由時間を趣味用に堪能できたのは英華書館の西に隣接する城内へ入る小東門と、そこから北西の老化門をほぼつなぐ、城内で言えば 5 分の 1 ほどの面積の範囲内に集中していることがわかる。その全体の動きがわかるように、2 月までとそれ以降に分けて、抽出の漏れた日の行動も含めて図 15 と図 16 に示した。両図とも傾向は同じである。行動が集中した地区は、形で言えば南北に長い三角形の形のなかに収まる。もちろん、城内南部の小南門や大南門を出入りして城内を縦断する事もあった。それは幕府の派遣船で来た 9 人が、宿舎がとれず、

小南門外の王家に滞在し、時にその彼らと接触があったためである。しかし、それは数回で、城内でも西北、西南の地区には行っていないし、西門には出入りさえしていない。これらの地区は、港から離れ、農地もまだ多く残り、また西門一帯は英仏軍が支配しており、軍隊が嫌いな吟香は感覚的に近寄らなかったのかもしれない。また、城内東南部の道台など役所があつまる一帯にも近づいていない。役所とは関係がなかったからである。また英仏の租界も時に大馬路の劇場へ行くくらいで、黄浦江沿いの街路も通い道としてアスターホテルと領事館程度であった。逆に吟香が集中した 5 分に 1 に当たる東北地区は、城隍廟を中心に、湖心亭や門前町が形成され、多くの商店が集積し、まさに江戸と同じような繁華街の街様相を示していた。吟香は宿舎のある虹口の田舎の故郷にも重なる空間から、江戸育ちの慣れ親しんだ廟一帯の賑わう街の二つの空間を楽しんだといえる。街だけでなく、田舎を時に味わう状況が日記の中にもしばしば登場する。

筆者は、先に 1882 年に、千歳丸で上海を訪れた藩士たちの上海での行動空間を追ったが、高杉晋作のようにほとんど出不精で徘徊が嫌いだった例を除けば、取り上げた人物たちの

多く、特に浜松藩の名倉予何人などは、武士であるのに徹底的に上海を徘徊し、住民と広く交流していて、徘徊した行動空間は広い⁽²¹⁾。その点で吟香のそれとは好対照である。

(2) 吟香が作ったコミュニティ空間

吟香は、漢学を修めた幅広い文人でもあり、上海では持ち前の竹画や詩歌作りの才能を発揮し、その才能が上海の文人たちを引きつけたことにあった。しかも、漢学の素養が上海の文人たちと引けをとらない筆談を可能にしていた。当時の清国では、標準語はなく、共通する文字による筆談こそが文字の読める人たちの間の地方間の意思疎通の手段であり、それを可能にしていた。1882年の各藩から選ばれた武士たちもその点は同様で、筆談で交流した。したがって、吟香は自分の才能と関わる趣味的世界を発揮できる城内が行動軌跡の中心になったのである。

その出発点は、当初の日記が欠けているため、不明であるが、日記が残っている最初の12月にはすでに多くの上海人と交流が進んでいた。当初もその決め手は竹画であったように思われる。竹画は支那人の文人の間でも人気であったからである。すぐ竹画の好きな上海人が集まってきて、茶菓やまんじゅう、酒での会が開かれ、交流が始まっていた。この竹画を吟香は次々に描き、近しい人たちから順にプレゼントをしている。こうして竹画を軸に交流コミュニティが形成された。仁圃先生、学松、雲山、涂子巢、凌蘇生などにネットが形成された。とくにこれら上海の文人の中では、仁圃先生がその受け手の中軸になった。吟香は礼儀正しく、まじめで学問もある仁圃先生に敬意を表している。仁圃先生も吟香が漢学に素養があることを知り、吟香を大切にしている状況が読み取れる。このように吟香と仁圃先生を中核にして書画を巡るコミュニティが形成されたといえる。

しかも、この書画は筆や紙、墨などの道具にまで発展し、その交換や専門店も巻き込み、書画を扱う商人まで書画や道具の売買を通じてこの渦の中に入ろうとするようになったことがわかる。こうして、吟香はもっぱら「東洋先生」と呼ばれて有名になり、その体型が目立つこともあって子供たちからも人気があった。

(3) 日本人との交流

もう一つ、上海滞在中に、吟香は日本人グループと接触することにもなった。大きくフランスでの万博参加への派遣グループと、幕府による上海派遣グループとに分けられる。フランスへのグループはわずか3日間だけの滞在であったが、吟香はこのグループに親近感を持ち案内もしている。代表の「みんぶ様」はまだ若い、かつて吟香が水戸藩江戸屋敷で講義を担当した関係もあったし、メンバーの中に知り合いが何人もいたからである。それに対して、上海派遣グループの9人については、八木と高橋の二人とは個別的なつながりを持ったが、全体的には記録がやや少ない。この派遣グループは画家の高橋を除けば武士であり、武士をやめた吟香にとっては彼らを評価しながらも、遠慮したところもあったのだろう。そしてかれらの宿舎がやや遠い南端の王家であったことも、親しくするには物理的距離があったと思われる。最後には吟香はもっとも親しみを持っていた同業の画家の高橋にも振られている。王家から吟香のいる虹口までは遠いし、それ以上にきらきら輝く吟香の才能に、高橋の方にどこか遠慮がでたのかもしれない。帰国してから高橋ががんばったのもそのあ

⁽²¹⁾ 前掲 (9) -①、②。

たりに理由があったのではないかと推測したくなる。あと、イギリスへ行く土佐藩の一行6人にも会っているが、そのうちの一人とも面識があり、吟香の顔の広さがわかる。

しかし、今回、吟香自身が上海に最も早く来たと自負していたのに、次第に弘光や蘇我、森などといった自由にアジア地域を動き回る日本人が、目の周りに出現し、その存在を知り、驚くと同時に大きな刺激を受けたに違いない。彼らとは親しく、丁寧に交流していることからわかる。そこが独断にならない吟香の良さなのだろう。

（4）吟香の抱負

吟香の日記は、吟香が主張するひらがな中心のいわば言文一致のスタイルで書かれている。その背景には、幼少から漢学を学び、それを極める立場まで達しながら、政争の影響を受け、武士をやめ、庶民の中にはいつて色々な仕事を体験した中から、学問は何のためか、人々に役立っていないのではないかとという疑問をもち、その大きな理由は、多くの人が読めない角張った四角い文字、つまり膨大な漢字が弊害になっているためだという考えに到達したためであった。しかも、これまでの支那の漢詩漢文、李白や杜甫などの詩の内容も、実用にはほど遠く、それらの古典は全く役に立たないとし、多くの人々は、実用的な知識や知恵を欲しがっている。それに答えるには、まず文字の変革からだという論理である。

この点は、この日記の文体の妥当性を主張するためか、日記の中でも早い時期から記している。そして、少し、金が出来、衣食が足りたら、歴史、天文、地理、医書、養生書、歌や詩の本を著したい。とくに地理では、地球上の六大州の国々の風俗、気候、植物、動物、そして支那の国については、その歴史と変革を正して書きたいとしている。そしてひらがなにより、町人、百姓、雲助でも読めるようにしたいと記し、まずは日本史、万国地理書、地球説略、博物新編のような本から始めたいとしている。後2書は、3月中旬に黄近霞からもらった同名の本から着想を得たのだろう。

そして、帰国後、吟香はこの構想を着実に進め、楽善堂の名で日本だけでなく、清国でも目薬のほか、実用書として画期的な出版活動を活発に行い、多くの人々の心をつかんだ。

（5）日記から見る日清関係

吟香の日記からは幕末期の日清関係が散見される。吟香より前の1882年に第一次の上海派遣船が、貿易の可能性をオランダやイギリスの援助で実現し、あと二次、三次と続き、吟香はその三次派遣の日本人と上海で遭遇している。幕府と清国間の交渉はまだ試行期であった。上海に来た吟香は、清国のキリスト教布教が認められた体制の中でヘボンとの上陸が可能だったのであろう。最初の日記を欠くため、上陸時の状況はわからない。

また、日記からは、上海が日本からフランスやイギリスへの寄港地となり、また、上海から長崎や横浜への船舶が、清国商人を中心にしてかなり自由に行き来していることもわかる。日本側では外国人居留地が拠点になっている。それらの船便は、吟香や上海の商人の手紙を個人単位の預かり届けという形をとりながら、一週間ほどで届いているのはかなり迅速で、清国商人たちが作り上げたネットワークの成果がうかがわれる。幕府はこの時に開国に踏み切っているが、まだ公式な両国の交渉のない中で、かなりゆるい形のつながりがすでに展開していたといえる。

さらに、日記の中では、日本人が上海と香港、広東、さらにはインドまで行き来している様子も浮かび上がってくる。漂流民の音吉がこの少し前まで上海にいたが、漂流民ではなさ

そんな日本人が東アジアを動き回っていたことは、非公式な貿易や南蛮船などの長崎への出入りの影響があったことも推察される。そこに断片的とはいえ、吟香の克明な記録がもたらしてくれる面白さがある。

おわりに

以上、岸田吟香がはじめて訪れた上海での 1866 年 9 月から翌 1867 年 5 月までの滞在期間のうち、日記が残る 12 月、1 月、3 月の 3 ヶ月分についての記録から、吟香の空間行動を軸に検討した。上海への到着時から当初の状況が、日記の欠落により不明なのが残念ではあるが、残された記録からも前述の 5 節で示したように多くの状況を読み取れる。それは、吟香が主張する言文一致体のひらかな文で、毎日の行動を克明に記録したからである。その一部は、その後、雑誌に掲載されたりしてそれなりに読まれ、原文一致という新しい試みとして、その後の明治時代の吟香自身の新聞記事や書籍、そして広く日本文の表現や新聞書籍の漢字へのこまめなふりがなをつける方式にも影響したのではないと思われる。

日記記録の内容からは、前述したように、吟香の書画への関心と優れた筆談能力から、行動軌跡の空間は、当時の上海全体から見ると限定的ではあったが、その結果、100 人以上の多くの文人を含む上海人との交流が見られ、しかもかなり繰り返し会っていて、高密度の交流を実現し、上海人から「東洋先生」として愛称されている。当時の上海は租界を設定した英仏米人たちもいて、英仏米人たちは長髪賊の乱こそ上海を守ってくれたが、普段は上海人たちにとって彼らには言葉が通じないし、筆談も無理で、しかも支配者的な顔があり、普通の接触が難しかった。吟香も彼らとはほとんど接触していない。その点で、吟香は同じ漢字を使い、「唐風」の書画を愛でるという上海人との共通項があり、まだ知られていない日本への上海人の期待感もあって、吟香を中心にしたコミュニティまでもがつけられた。吟香もそれに十分応じられる書画の実力を持っていたことが大きい。吟香はそれぞれのつきあいの中で上海人の特性を理解し、行動している。それが後に、吟香が上海へ進出した楽善堂での事業を成功させたといえるだろう。

それに関連し、帰国後、目薬「精錡水」の販売成功はヘボンからの業務の援用であり、ほかの医薬への発展にもつながっている。新聞社の立ち上げや新聞記者、そして出版事業は、上海時代の日記にある庶民への情報提供の必要性への言及にも起因している。商人たちが上海と日本、さらには東南アジアとのつながりを欧米船に求めていたことは、吟香に東京と横浜をつなぐ船会社の設立の背景にもなったであろう。また、失敗はしたが、石油採掘は上海の租界や横浜の外人居留地での灯かりの普及からの着想でもあろう。日本初ともいえそうな社会施設の設置は、宣教師ヘボンとのつきあいの賜のようにも見える。

このように吟香の初めての上海経験は吟香のその後の多方面での大活躍の原点となったといえる。

最後に、荒尾精との関係であるが、その出会いはこの後 20 年ほど後の 1886 年のことだった。吟香はすでに何度も上海の地を踏み、楽善堂を構え、国際商人として事業にも成功し、多くの上海人とのコミュニティを形成していた。そこへ突然現れた荒尾は、吟香が初めて上海の地を踏んだ年齢とほぼ同じ。その若者が清国に強い関心を持っていることを知り、吟香はそれが本気かどうか疑った後、日清間貿易をめざすその強い心の持ち主であることを確認し、吟香が得た上海、清国での貿易と商売上の知識を教え、荒尾に漢口での吟香の支

店開設を認めた。日清戦争が始まる 10 年近く前のことであった。荒尾は、それらの成果を踏まえ、1892 年大著『清国通商総覧』を、のちにビジネススクールである東亜同文書院の院長になる根津の手を経て編集・出版している。そのため、吟香はのち当初の東亜同文書院とその経営母体の東亜同文会の理事としてつながりを持った。

付記

本研究を進めるに当たり、文科省科学研究費助成事業基盤研究(C)、(課題番号 26370934、「近代中国地域像基軸と変動」)を利用した。謝意を表したい。